

第 57 回宮崎海岸市民談義所 議事要旨

日時：令和 7 年 4 月 19 日(土)13:00～17:00

場所：佐土原総合支所 2 階研修室

参加者：

□市民：12 名

□宮崎海岸市民連携コーディネータ：

吉武教授（九州工業大学）

高田准教授（兵庫県立大学）

□行政関係機関：

（国）宮崎河川国道事務所、宮崎海岸出張所、宮崎港湾・空港整備事務所

（県）河川課、中部港湾事務所、宮崎土木事務所

（市）佐土原総合支所農林建設課

実施内容：

宮崎河川国道事務所田脇副所長より開会の挨拶、新年度赴任した国、県の担当者の自己紹介、他行政機関とコンサルタントの出席者の紹介を行い、その後、高田宮崎海岸市民連携コーディネータ（以下「コーディネータ」）の進行により談義が進められた。

コーディネータより今日の流れを説明し、「宮崎海岸の検討体制の確認」として、トライアングル、ステップアップサイクルによって事業が進められていく仕組み、談義所のルールについて説明した。

その後、事務局より、これまでの経緯、本日の位置づけ、今後の見通しを説明した。引き続いて「第 56 回宮崎海岸市民談義所の振り返り」「効果検証分科会・技術分科会の報告」「先行着手に向けたここまでの流れ」を説明し、コーディネータより各分科会に伝えた談義所意見について説明した。その後「先行着手の小突堤への配慮事項」について談義を行った。

※会議の開催前 1 時間程度で、従前より参加している市民と初参加の市民との知識のギャップを埋めるとともに、市民談義所への理解を深めるため、来場者の質問に回答する相談窓口を開設した。

1. 宮崎海岸の検討体制の確認

2. 第 56 回宮崎海岸市民談義所の振り返り

〔参加者〕

- ・海岸に砂がないので、突堤をつくっても砂浜はつかないのではないかと。砂浜をつけるためにはかなりの量の養浜が必要だと思う。そのためには総合土砂管理で河川と連携しなければいけないのに、今日の事務局からの説明にはその話がない。令和 7 年 3 月に流砂系委員会に出席したが、流砂系の委員は海岸では砂がなくて困っているという認識がなかった。川と海の連携がないのではないかと。総合土砂管理の説明がないのはなぜか。

〔事務局〕

- ・流砂系の担当課との情報交換は常日頃よりしている。養浜についても国・県・市が河川で掘削した土砂を海岸の養浜に持ってくるという取り組みを行っており、様々な分野の事業の土砂を持ってくるという取り組みを行っている。これも一つの総合土砂管理であり、河川と連携して進めているところである。
- ・将来的に川から出る土砂については、多くの関係者との調整も必要であり、長期的に取り組むことが必要だと考えている。

〔コーディネータ〕

- ・総合土砂管理の観点で、川から出てくる土砂を自然の状態で海岸へ流す取り組みはまだできてない。しかし、川の上流で出た砂を人工的に運ぶという段階での連携は今もできている。将来的に川からの土砂を砂浜形成に寄与させるといいう長期的な議論と、短期的に行っている河川との連携と両方の話が含まれていたと思う。総合土砂管理での連携状況やそれが海岸にどのような効果をもたらすのかについては、市民談義所にも情報共有してもらいたい。

〔参加者〕

- ・砂浜は干満により広くなったり狭くなったりする。どのような状態の浜幅を目標として示しているのか。

〔事務局〕

- ・護岸区間は護岸の法肩、自然浜の場合は H20 年 12 月測量の浜崖の法肩を浜幅基線としており、そこから海側に 50m の箇所が T.P. ±0m になることを目指している。

〔参加者〕

- ・宮崎港の人工ビーチでは砂が毎年かなり溜まるため、砂が入らないように北側の防砂堤を延ばしているが、どのくらいの効果を見込めるのか。

[事務局]

- ・宮崎港に流入してくる砂を止めるために防砂堤を建設中である。計画長 300m に対して 160m 程度できている。どの程度砂を止めているかは正確には把握できていない。事業着手前は毎年のように、マリーナの航路入口を浚渫していたが、一昨年度とその前年度は浚渫を実施していないことから、推測ではあるが、事業の進捗に合わせて効果が現れてきているのではないか。

[コーディネータ]

- ・一ツ葉防砂堤の北側の土砂の溜まり方がわかれば、宮崎海岸で突堤をつくった時にどのくらい砂が溜まるのかについて、宮崎海岸の参考になるのか。

[事務局]

- ・一ツ葉防砂堤の漂砂の上手側(北側)に離岸堤が設置されており、宮崎海岸で当初計画されていた突堤(300m)、補助突堤①(150m)、補助突堤②(50m)の条件とは違うため検討してみないと正確にはわからない。

[参加者]

- ・一ツ葉防砂堤は 300m まで延伸とのことだが、当初計画と同じ延長なのに延伸できるのはなぜか。漁船が通らない場所なので延伸できるということか。

[参加者]

- ・一ツ葉防砂堤の事業については、事前に県が漁業者等へ説明を行い理解を得ているのではないか。

[参加者]

- ・コーディネータが委員会に伝えた市民の意見に対する回答はあったのか。

[コーディネータ]

- ・コーディネータが分科会に伝えた内容は後ほど分科会の報告があるのでその時に説明する。

[参加者]

- ・資料②p. 19 の宮崎海岸の土砂収支について、対策本格化前が-22 万 m^3 /年、対策本格化後の現状は-5 万 m^3 /年となっている。5 万 m^3 /年の養浜を追加すれば今よりもっと砂が増えると理解してよいのか。

[事務局]

- ・養浜を 5 万 m^3 /年増やしても±0 となる。出ていく砂の量と入ってくる量が同

じなので現状維持となる。

[参加者]

養浜を 5 万 m³/年増やしたら現状維持というのは憶測ではないか。

[事務局]

・推定した土砂収支を用いた計算上では、出ていく砂の量と入ってくる量が同じになる。

[参加者]

・必ずしも一緒ではないのではないかと。一ツ葉防砂堤を延ばしたことで 2 年間浚渫をしなくて済んだとのことだが、その砂はどこにいったのか。一ツ葉防砂堤を 300m まで延ばしていく間に海岸に対する良い影響があるのであれば、それも考慮すべきではないか。。

[事務局]

・土砂収支は数値シミュレーションではなく、実測した測量結果や土砂浚渫の実績をもとにして作成している。

[事務局]

・一ツ葉防砂堤は 300m 延ばす計画であり、その条件で数値シミュレーションを試行的に実施したことがある。一ツ葉防砂堤により宮崎港に入る土砂が少なくなり、その北側に砂が溜まる。そこから宮崎海岸の突堤(75m)までは約 2km あり、その間を砂で埋めることになるが、数値シミュレーションでは 200 年後でも宮崎海岸まで砂浜が回復することはなかった。

[参加者]

・資料②p. 19 の対策本格化後の現状をみると養浜は毎年 16 万 m³ 入れたということか。不足している 5 万 m³ は資料②p. 17 のグラフの石崎浜の侵食分という理解でよいのか。

[事務局]

・養浜は毎年 16 万 m³ ということではなく、平均値である。資料②p. 17 の測量結果は、必ずしも石崎浜の侵食ではなく、宮崎海岸全体で平均的に毎年 5 万 m³ 失われているということである。

[参加者]

・今日の市民談義所の議事の時間スケジュールを教えてください。終わりの時間も記者発表と異なっている。予定が立てられないので注意してほしい。

[参加者]

これまでの市民談義所の意見が分科会等でどう反映されたのか教えてほしい。市民談義所に決定権がないのは承知している。少しでも事業に反映されればと発言していくことが市民談義所の役割と考えている。事業主体から理解いただきたいという説明や意見を言うだけの談義所では、市民のストレスになる。

～ 休憩 ～

3. 効果検証分科会・技術分科会の報告

4. 先行着手に向けたここまでの流れ

[コーディネータ]

- ・市民からの意見を3つの懸念としてまとめ、分科会に報告した。
- ・先ほど、市民からの意見に対する分科会の回答についての質問があったので説明したい。
- ・小突堤7基を入れることが計画として決定しているわけではなく、小突堤7基を入れるかどうかの検討から進めていくことを市民としっかり共有するように専門家から言われている。その上でどういう効果があるのか、どのような将来像を見越して対策を進めていくのかということの一つとして小突堤で見込まれる効果を今日前半に事務局から示してもらった。
- ・小突堤の景観について、談義では自然の素材で突堤をつくれないのかという議論もあった。景観の専門家からは海岸の景観を考えた時に小突堤は脇役でありできるだけ目立たなくする、海岸の風景になじませる考え方が景観デザインとしては必要である、そのためにはブロックの表面を砂浜の色に近い色にし、エイジングさせていくことが大事であるという説明があった。

先行着手で小突堤を1基建設し、その後どういう影響があるのか効果を見ていくことと、長期的にみて海岸全体の対策を考えていくところは分けて考えていかなければいけない。エリアによって浜幅50mを確保できるところ、できないところがあるので、小突堤7基から検討をスタートし、他の対策も考えつつ、エリアによっては目標も変更する必要があるのではないかという議論があった。

[コーディネータ]

- ・構造物はできるだけ少なくして浜幅50mを目指す基本方針は変えず付帯事項で対応という判断は市民談義所の意見を意識したものである。
- ・資料②p.35にサンドバックを小突堤に使えないかという意見があったが、構造物の問題等が示され議論されていた。

[事務局]

- ・市民談義所で意見のあった突堤の長さについては、意見も踏まえてできるだけ沖に出すよう考慮した構造としている。ただし、そうすると小突堤の基部と護岸に間が空くことになるため、そこは仮設工として養浜や捨石で施工し、砂を止める機能を確保するという議論がなされた。

[参加者]

- ・前回談義所で小突堤、既設の突堤ともに堤長 50m ではなく 75m の方がいいのではないかという議論があったが、それに対する専門家の回答を教えてほしい。

[事務局]

- ・突堤の長さは、過去のある時点の汀線の位置までの長さということで調整している経緯がある。漁業者の意見として堤長 50m と強い思いがあり、その中でしか調整できていない状態である。

[コーディネータ]

- ・分科会の専門家も突堤の堤長は長いほうがいいという発言はあった。技術的にも長い方がいいことはわかってはいるが、現状、社会的制約条件の中での判断で堤長は 50m ということである。

[参加者]

- ・現状、ということは今後も堤長 75m にはできないということなのか。

[事務局]

- ・社会的背景や制約条件が変われば延ばせる可能性はある。できるだけ延ばしたいという意向は伝えて調整を継続するが、現状実施可能なのは堤長 50m までということである。

[参加者]

- ・突堤を延ばすことによって、砂がつくので浜の位置が昔の位置に戻っていく。談義所で市民も突堤を延ばしたほうがいいと言っていることを、委員会の委員（漁業関係者）に伝えてほしい。

[参加者]

- ・新設する小突堤の陸側の基部は開けたままにしておくのか。

[事務局]

- ・具体的な方法はこれから検討するが、突堤の機能上、漂砂を制御する上で重要であると考えている。これから検討をしていくが、技術分科会からも検討内容を報告するようにとされている。

[参加者]

- ・資料②p. 37 では小突堤の工事範囲は護岸から 100m 程度になるが、施設の機能として期待できるのは 100m 程度と理解してよいか。

[事務局]

- ・工事範囲は護岸から海側に 100m 程度となる。小突堤の陸側基部は仮設工等で埋めれば漂砂を制御する機能は期待できる。一方、海側の先端は法面で下がっていくため、十分に漂砂を制御する機能は期待できないと考えており、機能が期待できるのは沖側の天端面 50m のところまでである。

[参加者]

- ・前回の談義所で突堤の利活用（視点場）の話があったと思う。そのことを考慮するのであれば人が歩けるように護岸とつなぐことも考えられるが、その検討は行っているのか。

[事務局]

- ・小突堤の利活用を推奨するかどうかは、事故等に対する安全管理に十分な対策が必要であるため、現状では自己責任の範疇とせざるを得ない。今後の展開として利活用について検討することは考えられる。

[参加者]

- ・既設突堤も含めて突堤 10 基で目標達成と考えているのであれば、当初計画でそのような対策案は検討しなかったのか。今回小突堤をつくるなら確実につくれるもの、できるだけ砂が溜まる形、海岸が分断されないような形状、護岸との擦り付け等を十分に検討していただきたい。

[事務局]

- ・国の直轄事業を開始する前には宮崎県で侵食対策を検討しており、その中には短い突堤を複数基設置する対策案があった。しかし、なるべく海岸を区切らずに、自然をできるだけ残すように考えたのがこの直轄事業の始まりである。
これだけ養浜が実施されてきた海岸は全国でも他に例がない。市民の意見と行政関係者の努力の上で実施できている。

[参加者]

- ・地球温暖化の影響の評価は過去から変化しているのではないかと。海岸事業として考慮していくのか。

[事務局]

- ・気候変動については、計画に見込む必要があると技術分科会から指摘を受けている。ただし、事業への反映の方法・タイミングは結論がでてない。事業としてどのように取り組んでいくか宮崎県とともに検討中である。

先行着手の小突堤への配慮事項【談義】

※付箋紙を用いたワークショップ形式で談義を行った。事前に付箋紙を参加者に配布し、小突堤・事業全体等について質問・意見・提案・想いなど記入してもらい、会場に設置した用紙に付箋紙を貼り付け、その付箋紙を見ながら談義を行った。

本日の談義	
■談義の項目	
先行着手の小突堤への配慮事項	
■談義の進め方	
○侵食対策等について、みなさんに質問・意見・提案・想いなどを付箋紙に書いて頂きます	
○付箋紙を見ながら談義します	
付箋紙: 質問・意見・提案・想いなど ・ここまでの議事の内容に関して ・対策の実施において利用・環境などで配慮してほしいこと ・宮崎海岸に関する想い など	

～ 休憩 ～

[参加者]

- ・石崎浜の鯨館の前面の傾斜護岸の区間には砂浜がまったくない。砂浜を回復する対策をしてほしい。

[参加者]

- ・前回の市民談義所では、本突堤・補助突堤①・補助突堤②の間に2基ずつ小突堤をいれれば砂はつくという話であり、それであれば75mまで延ばしてはという話をした。小突堤と補助突堤②はかなり離れている(事務局注: 約0.6km)が、補助突堤②にもっと近くしたほうが効果もわかりやすく、住吉エリアでの対策

の試験的な位置づけにもなるのではないかと思います。

[事務局]

- ・住吉エリアは小突堤で対策しても目標浜幅 50m は厳しい。目標も含めて保全の方向性も再考する必要があると技術分科会で議論になっている。住吉エリアは小突堤だけではなく他の対策も含めてこれから検討してくことになっている。動物園東エリアより北側は、小突堤と養浜で浜幅 50m は見込める可能性があるという議論になっており、この方向で対策していくことを考えている。

[参加者]

- ・先行着手で動物園東エリアに 1 基設置するという対策については理解している。ただし、住吉エリアの既設突堤に近い箇所に設置したほうが、既設突堤の効果を検証できるのではないかと考えたところである。

[事務局]

- ・今回小突堤を設置して砂浜の回復を図ろうとしている動物園東エリアは、住吉エリアと地形が違っており、住吉エリアは違う方法を改めて検討する。
- ・検討のスタートの条件である本突堤～補助突堤②の間に 4 基小突堤を設置し養浜を投入しても数年経つと浜幅を維持できない検討結果となっている。住吉エリアは、目標・海岸保全の方向も含めて検討することになっている。

[コーディネータ]

- ・小突堤 7 基から検討を開始した。その検討では住吉エリアには 4 基の小突堤を追加する案であったが、浜幅 50m を確保することは難しい結果となった。そのため、現時点では住吉エリアは小突堤 4 基ではなく、別の対策や目標の再検討が必要ということになっている、ということだと思う。

[事務局]

- ・住吉エリアは小突堤 4 基をいれたとしても浜幅 50m の達成は厳しいため、小突堤ではなく他の対策を考えることとなった。目標を浜幅 50m でなくてもいいのではないかという考え方もある。そのかわりに護岸を嵩上げするなどの追加対策を実施するなど考え方は様々ある。現時点では決まっておらず、これから検討していくことになる。
- ・一方、動物園東エリアより北側は小突堤で浜幅を確保できる可能性があり、早期に砂浜を保全したいため、小突堤を先行的に設置することを検討している。

[参加者]

- ・その考え方であれば、先行着手の小突堤は動物園東エリアの南端ではなくもっと北側の方がいいと思う。台風シーズンは、動物園東エリア中央付近の里道よ

りのほうが浜はなくなる。

[事務局]

- ・動物園東エリアよりの砂浜を回復するために動物園東エリアの南端を提案している。もっと北側に設置しても効果は期待できるが、サンドバックが背後にあり、台風がきた時の波でサンドバックにどのような影響がでるのか不安がある。提案している小突堤の位置の北側のサンドバックは一度被災しており、その後補強対策をしているため他の箇所のサンドバックよりも強固である。提案している小突堤の設置位置の南側は傾斜護岸なので頑丈である。これらのことから、先行着手の位置を選定している。

[事務局]

- ・宮崎海岸は北から波が入ることが多いため、南へ動く土砂が多い。そのため、今回提案している先行着手の小突堤は、動物園東エリアから南側に土砂が抜けにくいように南端に設置している。一方、宮崎海岸では、台風シーズンは南から波が入ってくる。先ほどのもっと北側に設置してはというご意見は、この南から波が入ったときに砂は北側に動いて動物園東の浜がなくなるので、それをとめるような北側の位置に小突堤を入れてはどうかという意見と思う。

[参加者]

- ・なぜ住吉エリアは浜幅 50m を達成することが難しいのか。既設突堤の先端から 20m 陸側まで砂がつけば浜幅 50m となる。既設突堤周辺は昨年、一昨年頃から砂が相当ついている。

今回の小突堤は補助突堤②から 600m 北側に設置予定だが、住吉エリアだと効果がないというのがわからない。動物園東エリアの北側の方がより効果が発現しにくいように感じる。

[事務局]

[大判の空撮を皆で囲みながら説明]

- ・水深 5m の等深線をみると一ツ瀬川周辺は川から土砂がでていること、導流堤があることから海側に地形が張り出している。そこから南側はほぼ平行である。宮崎海岸で自然の状態で砂浜があるところは石崎川河口周辺であるが、ここでは水深 3～5m までは等深線が平行であり、水深 3m から波打ち際まで測ってみると 150m 程度である。すなわち、宮崎海岸で作用する波に対して、水深 3m～波打ち際までは約 150m 必要なことがわかる。

これを考慮して石崎浜の護岸付近を見ると、水深 3m から陸側に約 150m の位置にはコンクリート護岸がある。そのため護岸の基部が洗われる。同じ考え方で、動物園東エリアを見てみると一ツ葉有料道路のすぐ海側が自然状態での波打ち際の位置になる。そこを陸側に侵食されないようにサンドバックを設置し

ているため、サンドバックが露出することが多いという状況である。動物園東エリアで自然に砂浜がつくためには水深 3m の位置がより海側に位置する必要があるが、現状では土砂が足りないということになる。

動物園東エリアからさらに南側に水深 3m の等深線を辿てみると、住吉エリアは護岸が海側に張り出していることがわかる。補助突堤②周辺では自然の状態で汀線が現れるとしたら、一ツ葉有料道路付近となる。さらに南にいけばいくほど水深 3m の等深線と波打ち際の距離が狭くなっていく。住吉エリアは、このような状況であるため、砂浜を回復し、維持することは非常に難しいところである。これは、技術分科会でも同様の見解である。

[参加者]

- ・宮崎港あたりはどうして砂が溜まったりへこんだりするののか。大淀川の影響なのか。

[事務局]

- ・宮崎港ができたことで大淀川から土砂がまわらなくなった。防波堤は波を小さくするために港の機能として必要なのだが、土砂の動きを止めてしまう。南から波がきた時には防波堤で波が小さくなり土砂はあまり北へ動かないが、反対に北から波がきた時には南へ大きく動く。このように土砂は南北に動きつつも南側に多く運ばれていく。宮崎港近くに設置されている離岸堤はこのような動きを少なくなることを目的として設置されている。
- ・75m 突堤を 300m に延伸しようとしていたのは、この水深 5m の位置をぐっと沖にだそうとしていた。一ツ瀬川の導流堤は 300m 程度であり、その北側に砂が溜まっているのと同じような状況を再現する計画であった。しかし、75m 突堤を延ばすことが難しくなったのでそれができなくなった。一方、動物園東エリアは住吉エリアに比べると護岸が陸側にさがっている状況なため、浜幅 50m を達成できる可能性はあると考えている。

[コーディネータ]

- ・海岸のメカニズムや現状について勉強することも重要なので、勉強する機会を設けられたらと思う。

[参加者]

- ・アカウミガメの繁殖の視点から考えると、礫に注意してほしい。礫を入れるのであれば突堤の近い位置にまとめてほしい。

[参加者]

- ・突堤の先端の海面下部分は施設としての効果はどのくらいあるのか。すべて沈めた方が景観上は好ましいと思う。

[事務局]

- ・突堤を海面下に沈めると砂を止める効果は十分に発揮できない。

[参加者]

- ・どこまで突堤を延伸できるのかそのラインを地図上に示してほしい。将来、利用する相手（漁業者）と突堤延伸の話をする時にそのラインを示していた方がわかりやすいのではないか。

[参加者]

- ・波が集中するところに突堤をつくることについて不安はある。アナログ的な判断だと思う。

[コーディネータ]

- ・道路や街の整備の課題は明確に精度をあげて予測することができる。一方、海岸は数値モデルを作っても現場に合わせなければいけないので、アナログも大事にしなければうまくいかないということを海岸に携わって学んだ。だからこういう談義所とかトライアングルのやり方が重要と考えている。

[参加者]

- ・波の力がすごく集中する場所であり、海を知っている者からするとかなりリスクがある場所であり不安が大きい。動物園東エリア南端より 100m 南側（案 b）、200m 南側（案 c）の方がいいのではないかな。

[事務局]

- ・平成 27 年に動物園東エリア南端（案 a）の南側は被災し、3 万 m^3 土砂が削れた。ただ、この場所はサンドバックの設置位置を陸側に引いた上で 2 列にして補強している。このことを踏まえてこの位置（案 a）を技術分科会で提案し、異論はなかったという状況である。

[事務局]

- ・3 万 m^3 が削れた経験も踏まえて、小突堤設置の際には北側に 3 万 m^3 の養浜も合わせて実施する計画である。

[事務局]

- ・小突堤の基部を傾斜護岸につなげるかつなげないかの議論もあるが、そこをどうするかも今後しっかり検討しなければいけない。

[参加者]

- ・小突堤の基部をつなげないと、波が回り込んで沈むと思う。波打ち際で立っていると足の裏側が掘れて沈むのと同じと思う。沈まないようにするためには傾斜護岸とつながっていることが必要と思う。養浜で埋めるのでは強度が足りないと思う。基部についてはしっかり検討していただきたい。

[コーディネータ]

- ・基部の 25m を短くすると陸側に小突堤が引っ込んでしまう。そうならないように堤長 50m の制約を守りつつ 25m の基部の部分をどうするのかを解決できれば結果として、長い突堤としての効果が見込める。そこは方法や工夫が必要である。

[参加者]

- ・液状化による土砂の流動化などが起きる可能性は大いにあると思う。それを補えるだけの砂の量が必要と思うが、養浜砂の確保の目途はついているのか。

[事務局]

- ・国・県でやっている掘削事業についてはある程度把握している。連携してやっていく。

[参加者]

- ・事業全体について、あと 10 年間で完成させることが可能なのか。

[参加者]

- ・先行着手する小突堤 50m の完成時期についても教えてほしい。

[事務局]

- ・先行着手箇所の小突堤は、令和 7 年度は事前調査（地形・環境調査）を実施する。令和 8 年度までの予算で小突堤 50m すべて作るとは困難であるため、段階的に実施することを考えている。未確定な部分が多いので完成予定を今の段階で回答することはできない。

[参加者]

- ・75m 突堤ができて 10 年経過している。浜幅と養浜量を時系列で示して突堤の効果をグラフに示してほしい。養浜をしないと宮崎海岸は維持できないと思う。
- ・突堤の効果を水理模型実験で示すという意見も過去に出ていたと思うが、水理模型実験は相似則が成立しないため、現地でのデータから効果を確認できるとよいと思う。

その他（今後のスケジュール）

（特になし）

～コーディネータのまとめ～

〔コーディネータ〕

- ・本日は前回の市民談義所の振り返り、効果検証分科会、技術分科会の報告を行い、両分科会において市民談義所の意見がどのように反映されて今の対策案になったかを共有したことが大きな成果であった。
- ・市民談義所で出された市民の意見は、すべてが対策に反映されているというわけではないが、専門家や事業主体が何かを判断するときに大きな影響や効果をもたらしていることを改めて確認できた。
- ・動物園東エリアでは砂浜が多く消失しており、回復する必要があることを共有できた。また、先行着手箇所に配慮する事項として、小突堤をどのように使っていくかという意見があった。
- ・先行着手箇所の議論から発展し、住吉エリアの将来像をどのように描いていくのか、その目標設定はどのように考えるのか、その目標に向けた対策をどのように考えていけばよいかといったことも談義できた。
- ・これらの議論については、宮崎海岸トライアングルと宮崎海岸ステップアップサイクルで今後もしっかりと進めていけたらと考えている。
- ・本日の議論の内容は、利用者も出席する委員会にコーディネータとしてしっかりと報告していく。特に突堤の効果をできるだけ発現できるように 50m よりも長い突堤のほうが良いのでは、という市民談義所の意見を強調して報告したいと考えている。
- ・小突堤の基部の考え方などについては次回の市民談義所で議論できたらと考えている。

以 上